

Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



みすず書房の本棚

【無料送付】

No. 19 2016 夏

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

食と精神の本当の豊かさとは

武田 徹

私は世界でも料理から遠い種の人間であろう。自慢できる類の話ではないが、そう自信を持って言える。とにかく自分で食事を作ること、切れない。「魚を三枚に下ろす」とか、「肉に下味をつける」とか、まるで異国の言葉のように聞こえるほどだ。

料理実習が始まって数分のうちに同じ調理台を囲む男性たちは私に「あなたレシビを読み上げ、作業を確認する役目を果たしてくれ」と言い出した。「司令塔」とかおだてていたが、要するに私の包丁さばきあまりにも危なっかしかったので、流血を恐れていたのだ。

そんなわけで料理教室に通い、一年後には修了証書も頂いたが、腕前はまったく進歩せず、その後も料理する機会はなかった。そこで「男子、厨房に入らず」と偉そうにそっくりかえって女房の料理に舌鼓を打っているのなら亭主関白の鑑だが、料理の世界からほど遠い私は、食事へのこだわりからも遠いのだ。

取材などで移動の多い生活を続けていたが、いつしか出張中ではなく、普段から喫茶店などを転々としながら恒例になった。それは今

回、レイチェル・ローダン『料理と帝国』を読んだ私がどのような人間であるか理解して欲しかったからだ。副題に「紀元前2万年から現代まで」の「食文化の世界史」とある本を前にして私は身構えた。一方で近現代日本の文化史や社会史を専門にする身でもあるので、時間と空間のスケールはえらく違うけれど、社会階層や宗教などの文化的制度を背景に、時代ごと、地域ごとにいかなる料理がなされてきたかを丁寧に調べ、綴った本には大いに好奇心をそそられた。

しかし、その一方で、自分が叱られそうな予感もしていた。料理を嗜まず、食事へのこだわりを持たない人間には、人間的営みとしての料理の歴史を学ぶ資格がないとどこかできっぱりと言われそうな気がしていたのだ。

だが二万年の時間スケールで本当の「食の原点」を探ると、そうした主張のイデオロギー性が明らかになる。よくいわれている「食の原点は、現代のファースト・フードを批判するために、鏡に映すようにその対極に作り上げられた「理想の食のイメージ」に過ぎない。もちろん個々に食の理想を追求できるのもまた食の自由の実践だ。本書はそれを否定しない。けれど、それはあくまでも食の多様性を肯定する地平の上でのことだ。

こんな料理音痴では将来、もしも男やもめになった日にはさぞや不自由するだろう。そう心配した妻に強制的に料理教室に行かされたことがある。自分のレベルを考えて料理経験のない男性のみを対象とするコースを選んだ。初めて出席した時は、周りも私と同じような、料理に全然縁がなくてと不安げな表情の中高年男性ばかりだったが、先生の講義を拝聴して、いざ教室の料理テーブルを囲むと実力差が歴然とした。調理

商人や宣教師や軍隊が、海を越え山を越え、砂漠を渡り国境を過ぎ、いかに食文化を普及させてきたか。そこにはどんな出来事があったのか。包括的な歴史をみごとに描いている。

膨大な資料を駆使した丹念な研究であり、微に入り細にわたる書物だが、いったん読み始めるとページを繰る手が止まらない。食に興味がある人も、社会学、人類学、宗教史に

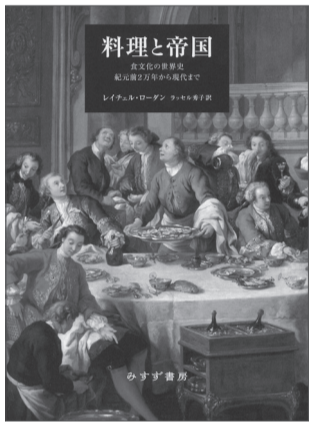
興味のある人も。本書はその期待に応えるだろう。読書人も専門家も、料理に関わる人も食品業界の人も面白く読める本。図版六八点、地図二〇点収録。索引を付す。

というわけで本書には食を巡る、視野の狭い諍いを超越する大人の視点が貫かれている。碩学の多くが、広大な学識ゆえに些細なことを気にせず、他者に寛容となる境地に至るが、著者もその例に違わない。しかし碩学は後学者を叱らず、気づきを促して自発的に軌道修正させる。食べ物を見る私の目が本書を読んで変化したことを最後に告白しておきたい。料理は人類の歴史そのものであり、そこには人間とは何かを学び、考えることに通じる入口がある。そんな入口が身近に開かれていたにもかかわらず、長らくそこを通過し、しななかったことを私は反省し、ちょっと料理をしてみようかなという気分になったのだ。(たけだ・とおる)

▽ご送付先の変更の際は、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードを、お手数ですがみすず書房営業部までご連絡下さい

絢爛豪華な食の絵巻

レイチェル・ローダン
《料理と帝国 食文化の世界史
紀元前2万年から現代まで》
ラッセル秀子訳



膨大な資料を駆使した丹念な研究であり、微に入り細にわたる書物だが、いったん読み始めるとページを繰る手が止まらない。食に興味がある人も、社会学、人類学、宗教史に

興味のある人も。本書はその期待に応えるだろう。読書人も専門家も、料理に関わる人も食品業界の人も面白く読める本。図版六八点、地図二〇点収録。索引を付す。

というわけで本書には食を巡る、視野の狭い諍いを超越する大人の視点が貫かれている。碩学の多くが、広大な学識ゆえに些細なことを気にせず、他者に寛容となる境地に至るが、著者もその例に違わない。しかし碩学は後学者を叱らず、気づきを促して自発的に軌道修正させる。食べ物を見る私の目が本書を読んで変化したことを最後に告白しておきたい。料理は人類の歴史そのものであり、そこには人間とは何かを学び、考えることに通じる入口がある。そんな入口が身近に開かれていたにもかかわらず、長らくそこを通過し、しななかったことを私は反省し、ちょっと料理をしてみようかなという気分になったのだ。(たけだ・とおる)

「目次抄」第一章 穀類料理の習得
第二章 古代帝国の性(にえ)と
しての大麥・小麦食文化/第三章
仏教が変えた南アジアと東アジアの
食文化/第四章 イスラム文化が変
えた中央アジアと西アジアの食文化
第五章 キリスト教が変
えたヨーロッパとアメリカ
大陸の食文化/第六章 近
代食への序章 北ヨーロッパ
パ/第七章 近代の食 中
流食のひろがり/第八章
現代の食 中流食のグロ
バル化/原註/参考文献
「世界史・料理」
(A5判・528頁・六八〇〇円)

一九六〇年代から現在に至るまで、現代詩の最先端を疾走する詩人、吉増剛造。詩の可能性を最大限に追求し、世界的にも高く評価されている。その詩作は、朗読パフォーマンス、写真、映像、銅版作品など多彩な形で展開されており、この6月から東京国立近代美術館でこれまでの創作活動を紹介する「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」が開催される。

詩はここまで到達した!

吉増剛造
《怪物君》



ジョンが立ち上がる。囁くように、叫ぶように、あらゆる声が響き渡る、世界に対する詩の応答。詩は遂にここまで到達した。【文学】

(B5変型160頁・四二〇〇円)

声ノマ 全身詩人 吉増剛造展 東京国立近代美術館

二〇一一年の大震災以来、詩とドローイング、映像、素描メタなど、のちに『怪物君』となる作品が次々と続けられてきた。本にするのは不可能といわれてきた詩の群れが、ついに詩集のかたちになる。震災の後に見た光景、土地の記憶、人々の声、古今東西の言葉……生者と死者が出会う場所に、途方もないヴィ

「フロイト」をへて「プロザック」へ

エドワード・ショーター
江口重幸・大前晋監訳

《精神医学歴史事典》

今日の精神医学は、過去半世紀を導いてきた精神分析学の実質的な死と、疾病の理解のために脳生物学を、治療の主要な有効性に精神薬理学を強調するものへの交代期とみることが出来る。概念も診断も混乱している今日、歴史上生まれきた概念の連続性と断絶の諸相は、どうなっているか。精神医学の総体を知るために、何が重要なのか。本書はその構想から誕生した初めての歴史事典である。いつ・どこで・だれが、いかにして精神医学について



「民主主義はその〈節度〉を超えたもの」によって病んでいく。そこでは自由は暴政と化し、国民は操作可能な群衆へと姿を変える。進歩を促進する欲望は、十字軍の精神に変化する。経済、国家、法は万人の開花のための手段であることをやめ、いまや非人間化の性質を帯びている。今日、民主主義の危機は外部(ファシズムや共産主義)からやって来るのではない。

科学者と経済援助

フィン・オセルー
矢崎裕二訳

《科学の曲がり角》

一九三〇年代にニールス・ボーア研究所では核物理学への転向が起こった。また同時に国際的基礎科学への資金援助情勢にも変化が生じた(ロックフェラー社会貢献事業に見られる変化などはその代表である)。そして研究所の転向は、この変化に対するボーアの反応と行動によって起こった。これは一体どういうことか、そして、それによって何が起こったのか。



世界の頭脳といわれる学者

私は今、いちばん自分らしい

メイ・サートン
《70歳の日記》

一九七三年、61歳で傑作『独り居の日記』を発表したあと、サートンはカナダに近いメソ州ヨークの人里離れた海辺に、独りで二度目の引越越しをした。『70歳の日記』はそ



メイ・サートン
本書執筆の頃

こで生まれた。アメリカの詩人、小説家、エッセイスト。ベルギー生まれ。第一次大戦時のドイツによる侵攻を機に、アメリカのケンブリッジに両親と亡命作家として、長い不遇の時代を経験する。著名な科学史家の父ジョージ・サートンの死、作品への酷評、レズビアンへの非難。そこで40代のとき一念発起し、自分と向き合ってみようと、独りでニューヨークから質問が飛ぶ一年を晴らし、どこかいいの

「今までの生涯で、いちばん自分らしくいられるからです」『エッセイ・アメリカ文学』【七月下旬刊】(四六判416頁・予二九〇〇円)

《世界文学システム》への挑戦

フランコ・モレットティ

《遠読》

秋草俊一郎・今井亮一・落合一樹・高橋知之訳



「世界文学」という用語がでまわらなくなったから二世紀がたつが、いまだに世界文学がなにか私たちが知らない。おそろしく、世界文学というひとつの言葉のもとに、あきらかに別々の種類の世界文学ふたつをおさめてしまっているのだ。一八世紀に先んじたものと、後につづいたものとして、「最初の」世界文学は、ばらばらの「地域」文化のモザイクであり、内在的に強い多様性を持つている。分岐することで新形式を生みだし(ある種の)進化論によって解釈してやるのが最適だ。二番目の「世界文学(世界文学システムと呼ぶほうが好まれた)は、国際文学市場によって統合されている。これは、増加する、ときに啞然とするほど大規模な同質性をみせる。その変化における主要な

みすず書房新刊

(2016.2.6)

東京・文京本郷5
区三三三(四〇三)
(価格は税別です)

文楽の日本 人形身体と叫び

ビゼ 自身義太夫を習うフランス人哲学者による、目からうろこの創見とエッセイに満ちた身体芸術文化論 秋山伸子訳 四二〇〇円

私は一本の木

宮崎かつら ハンセン病療養所長島愛生園で七十八年生き、米寿を迎えた人が刻む、きらめく人生の足跡。第二作品集 二四〇〇円

正義の境界

オニール グローバル正義から排除されるのは誰か? 正義の哲学的な境界と政治的な境界を考察する 神島裕子訳 五二〇〇円

時間かせぎの資本主義

いつまで危機を先送りできるか シュトレック 貨幣による時間かせぎはいつまで可能か、七〇年代から現在まで、資本主義の危機を解明する 鈴木直訳 四二〇〇円

指紋と近代

高野麻子 なぜ指先の紋様なのか。近代的統治の課題とは? イギリス帝国から日本帝国へ 今日に至る生体認証技術の変遷 三七〇〇円

手話を生かす

少数言語が多数派日本語と出会うとき 斎藤雄 手話があるから、そのままの自分で生きられる。異なる文化を脈々と紡いできた日本語とどうの豊かな世界 二六〇〇円

もつとも崇高なヒストリー

ラカンと読むヘーゲル ジシエック 精神分析と哲学を架橋し、現代を読む道を開く。ジシエックの思索のすべてが凝縮された書 鈴木直訳 六四〇〇円

ベイレイさんのみゆき画廊

銀座をみつめた50年 牛尾京美 創業五十名の画廊の先代オーナー 加賀登江の生涯をたどり、凛とした生き方を再発見する爽やかな記念誌 三三〇〇円

亡き人へのレクイエム

池内紀 彼方についてしまったけれどずっと大切な人。米原万里 児玉清 野呂那由美など二十八人の「ペン」による肖像画 三〇〇〇円

小尾俊人の戦後

富田昇 敗戦後の隆福で出版社を立ち上げた小尾俊人「夜と霧」刊行までの試行錯誤、奮闘とその人物像 創立70年記念 三六〇〇円

李禹煥 他者との出会い

作品見聞録と共存 V・B ヴァルターへ 生成と消滅 充滿と空虚、明と滅 李の芸術を解き明かすエッセイ 批判・世界文学【六月下旬刊】(四六判・352頁・四六〇〇円)

京城のモダンガール

消費・労働・女性から見た植民地近代 徐智瑛 植民都市ソウルを闊歩、日本の紡績工場や炭鉱町にも流れてきた女たち。忘れられた声から近代史。姜高橋訳 四六〇〇円

なぜ近代は繁栄したのか

草の根が生みだすイノベーション フェルプス 繁栄の個人主義、停滞のコーポラティズム。ノーベル経済学賞受賞者が長期停滞の処方箋を提示。小坂恵理訳 五六〇〇円

消去

ヘルンハルト 二十世紀ドイツ語圏の最重要作家と評される孤高の著者が描く、比類なき怒濤の圧巻長編 池田信雄訳 五五〇〇円

精神疾患と心理学

フリード その後の理論展開を準備した、著者の最初の著書。狂気を文化の積極的な表現と捉えた問題作 神谷美恵子訳 二八〇〇円

災害の襲つとき

カタストロフィの精神医学 【新装版】ラファエル 被災者の喪失感や仮住い問題からボランティアのストレスまで。メンタルケアの重要性を示す。石丸正訳 四八〇〇円

アジェのパリ

大島洋 百年前に撮影されたパリを、アジェの視線で歩いてみる。身体感覚の共有により生まれた、奇跡のような写真論 三五〇〇円

映画女優 若尾文子

四方田犬彦・斎藤綾子編著 改めて脚光を浴びる大女優を論じた、画期的な書物。インタビュー&全出演作データを収録 三八〇〇円

時の震え

李禹煥 韓国での幼少時代の記憶、旅と日常の時間空間への想い、キャンパスを前に心に浮かぶこと…… 自伝的エッセイ 四二〇〇円

電子書籍

生きがいについて 神谷美恵子 柳田邦男解説 二二〇〇円
最終講義 中井久夫 一六〇〇円
なぜ近代は繁栄したのか フェルプス 小坂恵理訳 五六〇〇円
貧乏人の経済学 パナジュー/デューロ 三〇〇〇円
善悪で貧困はなくなるのか? カララン/アベル 清川幸美訳 澤田康幸解説 三〇〇〇円

【以て7月以降順次配信予定です】死すべき定め ガウンデ/手話を生かす 斎藤雄/道徳力 斎藤雄/治りませんに よる 斎藤雄/信じない人たちのための(宗教) 講義 村山志/オシムの伝言 千田善/暴力について アーレント/地に呪われた者 フランソワ

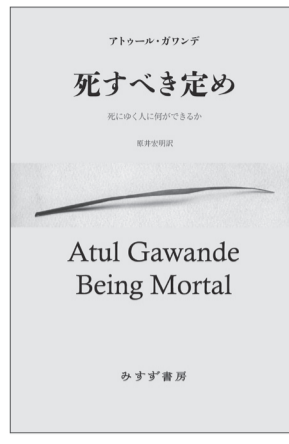
書評コラム

今日、医学は人類史上かつてないほど人の命を救えるようになった。しかし同時に、人はがんなどの重篤な病いと闘う機会が増え、寿命が飛躍的に延びた。老人ホームやホスピスなど家族以外の人々も終末期に関わるようになり、死との向き合い方そのものが変わってしまったのである。この「新しい終末期」において、医師やまわりの人々、そして死にゆく人は何ができるのだろうか？

インドの田舎町で長老として過ごすおじいさん、子供と離れて一人で都会的な生活を送るおばあさん、母親になっ

て、今日、医学は人類史上かつてないほど人の命を救えるようになった。しかし同時に、人はがんなどの重篤な病いと闘う機会が増え、寿命が飛躍的に延びた。老人ホームやホスピスなど家族以外の人々も終末期に関わるようになり、死との向き合い方そのものが変わってしまったのである。この「新しい終末期」において、医師やまわりの人々、そして死にゆく人は何ができるのだろうか？

インドの田舎町で長老として過ごすおじいさん、子供と離れて一人で都会的な生活を送るおばあさん、母親になっ



今日、医学は人類史上かつてないほど人の命を救えるようになった。しかし同時に、人はがんなどの重篤な病いと闘う機会が増え、寿命が飛躍的に延びた。老人ホームやホスピスなど家族以外の人々も終末期に関わるようになり、死との向き合い方そのものが変わってしまったのである。この「新しい終末期」において、医師やまわりの人々、そして死にゆく人は何ができるのだろうか？

終末期の豊かな生

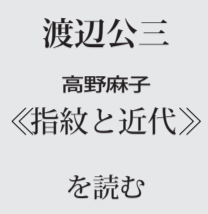
全米75万部のベストセラー

アトゥール・ガワンデ

《死すべき定め 死にゆく人に何が出来るか》

原井宏明訳

今、マイナンバーという怪しげな和製英語がこの国に飛び交っている。このカードもやがて現代生活のありふれた小道具として日常に溶け込むのか、あるいは、収入や税金の一元的管理のみならず、生体認証や身体生理・遺伝情報なども統合して、個人情報集積検索ツールとして必要に応じて(誰の必要に?)国民一人一人の首根っこを押さえる強力な国家装置に成長してゆくのか。この統治者の夢(悪夢?)に導きいれるための、それは巧妙な踏み絵ではないか。若き気鋭の研究者、高野麻子氏の『指紋と近代』を読んだ読者はふと、そうした思いに駆られはしないだろうか。



渡辺公三

高野麻子

《指紋と近代》

を読む

的ともいえる発見の過程には、インド行政官ハーシェンドヤード総監に栄転したヘンリー、ダーウィンの従弟で天才と称されたゴルトンに加えて、狂言回しとなっ

近代の交通手段が飛躍的に発展し、諸帝国間、植民地間の人の移動が激化した19世紀後半、人々は指の先に刻まれた「指紋」が、激しく移動し続ける人の身元を確定する強力な手段であることを発見した。その劇

近代の交通手段が飛躍的に発展し、諸帝国間、植民地間の人の移動が激化した19世紀後半、人々は指の先に刻まれた「指紋」が、激しく移動し続ける人の身元を確定する強力な手段であることを発見した。その劇

たフランス鑑識警察の創立者ベルティオンなど、世界史の舞台裏の群像が暗がり

終末期をどう生き、最期の時をどう迎えるのか。私たちが豊かに生きることに一杯で、「豊かに死ぬ」ために必要なことを、こんなにも知らない。「医療エッセイ・ノンフィクション」【六月下旬刊】(四六判312頁・予二八〇〇円) *電子書籍七月下旬より配信

てすぐに末期がんと向き合う女性……。本書の著者アトゥール・ガワンデは、外科医としていくつもの最期の決断に立ち会い、また家族として決断に迫られる。果たしてガワンデは身近な人の最期の日々を何を想うのか。現役外科医にして「ニューヨーカー」誌のライターである著者が描く、迫真の人間ドラマ。ときに人生の終盤をよりよくするために奔走した人々のエピソードが圧倒的な取材力と構成力で綴られ、読む者にもやがて訪れる終末期の選択について、深く考えさせるだろう。

古来人間は、昆虫をどのようか考えてきたか、つまり哲学してきたか。これが本書のテーマである。クモ、サソリはまだしも、ワニまでを昆虫に分類しようとした学者。ハチの巣、アリの巣に君臨するのは「王」か「女王」かという謎。社会性昆虫をめぐっては、共和制、王政、奴隷、労働などの擬人化された議論が白熱する。じつに面白い。

作家にみられる「昆虫学者の視線」に着目する。現代になると、ユクスキルの環境世界論があらわれ、ハイデッガー、カンギレム、メルロポランティ、アガベンに受容される。「昆虫は、科学的研究

「森の生活」で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

『森の生活』で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

や、芸術的創造や、哲学的思考へといざなう。「文化昆虫学」の好著といつてよい。『昆虫学・生物学・科学哲学』(四六判・248頁・三六〇〇円)

「人は昔のこと、それも夢中になったことだから忘れる。夢中のときは前後もわからないのだ。さらに、それを振り返る意味も不明になる。過去をもつ人の誰にもあることだ。流れるような日常の描写。そのあいまに出てくる二つの場面は、強く印象に残る。」

「夜のある町で」に始まった小社からの荒川洋治散文集は五冊目の『文学の門』で一つの区切りをむかえた。七年ぶりの新作『過去をもつ人』では、海外作品に触れているものも多い。タルコフスキー、ゾラの短編集、クンデラ『別

この小道具と組み合わせる中国人労働者、そして満州の舞台裏の群像が暗がり

『森の生活』で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

『森の生活』で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

読書が消えないように

荒川洋治 《過去をもつ人》

「人は昔のこと、それも夢中になったことだから忘れる。夢中のときは前後もわからないのだ。さらに、それを振り返る意味も不明になる。過去をもつ人の誰にもあることだ。流れるような日常の描写。そのあいまに出てくる二つの場面は、強く印象に残る。」

「夜のある町で」に始まった小社からの荒川洋治散文集は五冊目の『文学の門』で一つの区切りをむかえた。七年ぶりの新作『過去をもつ人』では、海外作品に触れているものも多い。タルコフスキー、ゾラの短編集、クンデラ『別

この小道具と組み合わせる中国人労働者、そして満州の舞台裏の群像が暗がり

『森の生活』で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

『森の生活』で知られるアメリカの思想家ヘンリー・ソロー。ウォールデン湖畔に自ら建てた小屋で自給自足し、森を毎日四〜五時間散策する。孤独で自由な生活を送った。森で結実したその思索は、自然と人生を深く洞察し、現代社会の危機を予見した、独自の魅力をもっている。

Advertisement for 'BETTER' book by Atul Gawande, featuring a doctor and text about medical ethics. Includes publisher information for Misuzu Shoten.

日本のデモクラシーのために

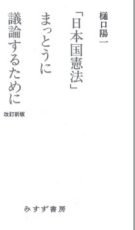
R・ドゥブレ/樋口陽一/三浦信孝/水林章/水林彪

安全保障関連法が施行されたなか、旧版で集い、法思想を論じた著者たちは、再び日本の民主主義を真剣に考えるために結集した。

フランスの「共和国」思想から何を学び、日本のデモクラシーにどう活かすのか。法、社会、思想…いまこそ、日本の民主主義をあらためて問わねばならない。「主権は、われわれ国民にある」、近代国家を否定する相手と闘い、日本社会を救う手立てを考えなければならぬ、と。

増補部分は三つの論稿より

昨夏、緊急改訂 重版出来



樋口陽一『日本国憲法』ま

つとに議論するために『改訂新版』(二八〇〇円)

田畑書店、美術出版社と版を新たに読み継がれてきた。70

新解説 國分功一郎

ジャック・デリダ 高橋哲哉・鶴岡哲訳 國分功一郎解説

「偽装した普遍主義でも、単純な多文化主義でもない、もう一つの方向性—いや、〈方向性〉すらも疑うこと。今日の時点でデリダを読むことは、そのような課題、二重の義務、約束の構造と向き合うことではなければならないはずである」(國分功一郎)

ソ連・東欧の崩壊後、噴出するナショナリズムと人種主義の「現代思想」(四六判・144頁・二八〇〇円)

幻の評論集 決定版がよみがえる

李禹煥 出会いを求めて

異国での制作と日常…「周りは他者の国であり世界は未知」という感覚は〈対話〉(出会い)の概念へ発展し、表現をめぐる思索を喚起する。60年代末から70年代初めにかけて書かれた文章は、硬直した理性と物象化を暴く近代批判の試みであり、新たな表現論を模索するものとして、田畑書店、美術出版社と版を新たに読み継がれてきた。70



中国の伝統思想

島田虔次 「儒教における生けるもの」を追求した、思想史家の論集。「明末清初」各論ほか。¥5200

この私、クラウドイウス

グレーヴズ 病身で吃音症、謎のローマ皇帝自伝? 『タイム』誌「小説100選」。多田・赤井訳 ¥4200

持続可能な発展の経済学

デイリー 環境/共同体の福祉/貧困を橋渡す大胆かつ周到な思想を凝縮。新田・蔵本・大森訳 ¥4500

10社共同リクエスト復刊

書物復権

2016

モードの体系

その言語表現による記号学的分析ハルト ファッション・ジャーナリズムを分析。意味はどのように作られるのか。佐藤信夫訳 ¥7400

歴史・レトリック・立証

ギンズブルグ 歴史(ヒストリー)は虚構(フィクション)なのか。歴史家の論集。上村忠男訳 ¥3500

新装復刊

父が子に語る世界歴史 [全8巻]

ジャワーハルルール・ネルー 大山聰訳

「お誕生日がくると、おまえは贈りものをもらったり、お祝いのごちそうを受けたりするのがならわしだった。けれども、このナイニー刑務所から、わたしはなにを贈りものにしたものだろうか?」—のちにインドの初代首相になったネルーは、インド解放闘争のさなか14歳の一人娘インディラに、世界歴史を語る200通の手紙を贈った。生きたことばと感動と新鮮さにみちた名著復活。

- 1 文明の誕生と起伏 5 民主主義の前進
2 中世の世界 6 第一次世界大戦と戦後
3 ルネサンスから産業革命へ 7 中東・西アジアのめざめ
4 激動の十九世紀 8 新たな戦争の地鳴り 各¥2700

みすず書房 近刊のお知らせ

8-10月の刊行予定から

- 若き科学者へ [新版] P.メダワー 鎮目恭夫訳 結城浩解説
ベンヤミン/グレート・アドルノ往復書簡 ローニッツ/ゲッテ編 伊藤・鈴木・三島訳
歴史学者の工房 草光俊雄
キッド—僕と彼氏が赤ちゃんを授かるまで ダン・サヴェージ 大沢章子訳
ザ・ピープル セリーナ・トッド 近藤康裕訳
生命力と進化(仮) ニック・レーン 斉藤隆央訳
日本の20世紀建築遺産 松隈洋
罪と罰の彼岸 [新版] J.アメリー 池内紀訳
夢心理学—ユング夢分析論集 横山博監訳 大塚紳一郎訳
慰安婦問題論 サラ・ソー 山岡由美訳
明治知識人としての内村鑑三 柴田真希都
(ウェブサイトにのご案内しています http://www.ms2.co.jp/book/new/)

みすず書房・最近の重版より

- 消去 [新装版] トーマス・ベルンハルト 池田信雄訳 ¥5500
道しるべ ダグ・ハマースホルド 鶴岡信成訳 ¥2800
長い道 宮崎かづ系 ¥2400
死者の贈り物 長田弘 ¥1800
手話を生きたる 齊藤道雄 ¥2600
「日本国憲法」まっとうに議論するために [改訂新版] 樋口陽一 ¥1800
時間かせぎの資本主義 ウォルフガング・シュトレーク 鈴木直訳 ¥4200
看護倫理 [全3巻] ドゥーリー/マッカーシー 坂川雅子訳 各¥2600
失われてゆく、我々の内なる細菌 マーティン・J. プレイザー 山本太郎訳 ¥3200
量子力学 I [第2版] 朝永振一郎 ¥3500

宮崎かづ系『私は一本の木』

書評にとりあげられました



麻子『指紋と近代』

には、安藤宏氏(読売新聞3月13日)、中島岳志氏(毎日新聞3月20日)、武田徹氏(朝日新聞4月10日)、麻生晴一郎氏(北海道新聞5月1日)など、齊藤道雄『手話を生きたる』には、中村桂子氏(毎日新聞3月20日)、竹田学氏(AERA 4月4日号)、稲泉連氏(読売新聞4月10日)、星野智幸氏(朝日新聞5月1日)、渡邊千糸子氏(婦人公論5月10日号)など。(本紙二面下に広告)

劇団民藝 公演 「炭鉱の絵描きたち」

傑作戯曲の日本初上演

劇団民藝の公演「炭鉱の絵描きたち」が、今月15日(水)から26日(日)まで、東京・新宿の紀伊國屋サザンシアターでおこなわれます。ウイリアム・フィッシャーが『イングリッド・ラングム』の作家たち(乾由紀子訳、五八〇〇円、みすず書房)で描いた、働く男たちの異色の画家集団(アアシントン・グループ)の実話にもとづく、脚本家リッ・ホル(リトル・ダンサー)他)による傑作戯曲の日本初上演です。

フエルプス『なぜ近代は繁栄したのか』

今月刊行 電子書籍も配信開始

本紙12月の号で、仮題を『Mass Flourishing』として紹介したエドモンド・フエルプスの著書を今月刊行。他に好評経済書2点、バナジウム/デュフロ『貧乏人の経済学』とカーラン/アペル『善意で貧困はなくなるのか?』も併せて、電子書籍の配信も始めました。(二面下に広告)

宮田昇『小尾俊人の戦後』

みすず書房創立70周年記念出版

特に創業の頃に焦点を合わせ、出版人・小尾俊人(としと)の等身大の像を描いた本書を今春刊行。(二面下に広告)



東京国際ブックフェア

今年9月開催です 年に一度の本の祭典「東京国際ブックフェア2016」は、会期を秋に移し9月23-25日の開催です。本紙次号で詳しくお知らせいたします。

みすず書房 営業部だより

弊社が所属する「書物復権の会」の活動が、今年で20年目となりました。リクエストを基に品切書を復刊する事業ですが、実は当初から変わらず強い危機感を持って臨み続けている企画であります。活動がスタートした20年前もすでに出版景気は下降気味でしたが、現在はさらに厳しさを増しています。街中にある書店の数が激減していることが物語るに及ばず、弊社のような出版社にとっては、今年も二十周年記念ということもあり、今年度の復刊(紙面左上の囲み内にご案内)と共に、過去に復刊した書目も一緒に展示していただける書店が数多くあります。ぜひ店頭にお運びいただけたらと思います。全国の主要書店でフェア展開中です。